

■報告者:保育園主任

むさしの幼稚園ならではの就学前教育カリキュラムの指導経験のある教諭が保育園の幼児クラス担任をしているので、むさしのの就学前教育を幼・保両方の担任が共通理解しつつ指導ができる。

幼稚園と同じ講師の為、保育園でも体育(1歳児のクラス～)、リトミック(2歳児のクラス～)の授業を保育時間の中にスムーズに盛り込むことができた。

連携施設の為、互いの施設を用途に応じて利用したり、幼保が合同で参加する行事を行うことができる。また合同で行うことで、大人の目が増えて安全面・役割の分業ができる利点がある。

幼稚園の子ども達も厨房で作っている手作りの給食・おやつを提供することができるようになった。

保育園に特化した保健・衛生関係や職員研修等を、幼稚園にも取り入れることができる。

幼稚園教諭が夏期休暇中に保育園へボランティア体験をする事により、乳児と接し、幼稚園入園前の子どもの育ちを学び、幼児の保育にもつなげることができた。

幼稚園の教員・預かり保育の教員も保育棟の本部に来て業務を行うなど、光熱費を節電することができつつ、部署の違う教職員同士の交流も生まれた。

教材類等で不足しているものを、互いに借りることができ、急な時に助け合うことができる。

■報告者:幼稚園教務主任

行事の際や普段の保育に於いても互いの職員が、手伝いあえる環境にあるので心強い。

施設が併設しているので、長期休暇を利用してボランティア体験ができ職員間の交流も生まれ、互いの仕事内容の理解が深まった。

人事移動の際の職場のイメージが具体化しやすい環境にある。

教職員数が増えたので、園庭利用の際多くの目で子どもたちを見ることが出来る。

乳児が身近にいるため、乳児の特性や衛生面での留意点等、今まで知り得なかった知識が増えた。より新しい情報が瞬時に入手できる環境になった。

保育園内での研修にも必要に応じて参加できる。

保育棟に、ほふく室やエレベーターがあることによって今まで受け入れが難しかった重度の障がい児の受け入れや多彩な活動が可能になった。

併設している保育園に子どもを預けながら幼稚園に勤務することができ、雇用体系の幅が広がった。

兄弟で幼稚園・保育園に通わせることができ送迎が一か所なので、好都合であると感じる。

交通安全教室や、虫歯予防デー等の行事と一緒に参加利用することができる。一労で二の効果も多い。

保育園・幼稚園の事務機能が統括されたことにより、担任は来客や電話対応に追われることなく業務に専念できる環境になった。

※新しい施設を利用することで気分も変わり、集中力もアップ。

※交流が増えたことで互いに良い刺激を受けることができる。

■報告者:事務長

保育園・幼稚園をあわせることで園児一人当たりの給食費単価が下がり、幼保ともに質の向上とともに経営負担や保護者負担が激減した。

学園の園児・教職員が栄養のバランスが行き届いた温かい給食を食べることができる。

二園同日に設備点検等を行うことでコストダウン。

日用品等も共有するものは大きな単位で発注。

共有によりイニシャルコストが削減されたり、ランニングコストを下げたり、一から準備し直す必要がない。

園あらゆる施設の共有ができ、体育教師、パート、課外授業等も共有。保育料徴収システムの共有。効率的かつ経済的である。

保育園にそろっていなかった教具などは幼稚園にないものを発注し、幼稚園・保育園・あずかり保育でローテーションできるようにする。単園よりも多くの種類に触れることができる。

単園ではなく保育園・幼稚園の看板にすることで、単園の場合より広告費が抑えられる。職員の募集も同じ。

幼稚園が培った信用、ネームバリューで保育園をスタートすることで、目立った宣伝をすることなく、園に理解の深い保護者が集まってきた。25年度の保育園入園希望者のうち、むさしの保育園を知ったきっかけとして 41%が幼稚園関係者の口コミ、15%が幼稚園と共有の看板。利用者のみならず金融機関、業者に対しての信用も一から築きなおす必要はなくスムーズにスタートをすることができた。

学園として人的な厚みが増した。むさしの幼稚園をベースに保育園畑出身者による知識、経験の導入があり人的な厚みが増した。親の代わりとして長時間子供を預かるためのノウハウ、心構え、怪我、病気に対する対処方法、分析、こまやかな目配り等は今後幼保の人事的シャッフルに伴い学園全体の危機管理能力の向上、サービスの向上につながる。一人の人間が教育、保育の両経験を重ねられることは、対応力、サービスの向上につながる。

幼稚園では3歳児からの入園である。しかし子供の発達には段階があり突きつければ 3 歳を知るには2歳を知り、2 歳を知るには 1 歳を知る必要がある。保育園を開園することで幼稚園スタート時の 3 歳に至るまでの子供たちの発達過程や背景等に触れることができる。

幼稚園に今まで預けていた園児を保育園に預け変えたり、下の子とともに保育園と幼稚園両方に預けるケースがでている。急な家庭状況下における子どもに対する負担も減らせる。保育園は性質上、園児の家庭状況まで深く把握をする。幼稚園単体では把握できなかった園児の背景の部分の情報量が増し、よりきめ細やかなバックアップが可能となるケースがある。

保育園と幼稚園とでは所轄や横のつながりが異なり違った角度からの情報が入る。異なる二つの角度から見ることで物事はより立体的に見える。子育て世代に対しより細かいバックアップできる可能性が高まる。また幼稚園では行っていない教職員の最近検査を保育園の高い基準に合わせる等、互いにより高い質を備えられる未来がある。

当園は保育園の他に、幼稚園+あずかり保育という選択肢があり、進級とともに幼稚園に切り替えることが可能である。切り替えても同じ学園内の為、転園にともなう子供や親に対する精神的負担も少ない。

幼と保という異なる役割を持つ認定こども園に所属することは、提供できることの幅が増える。また、同じ子供に接する仕事ではあるが適正も異なる。今後より自分に合った道を模索したり、部署の異動により自分では気が付かなかった適正や能力に気が付くこともある。

■報告者:総務部長

創立以来幼稚園で行われている、各種課外教室を、保育園児も受けられる。
指導員が時間に保育園に迎えに行き、終了し次第保育園に預けに行くという事が実際行われている。

幼稚園に送迎用の園バスがある為、保育園も幼稚園のバスで遠足に行ける。

登降園時間が異なるため、保育園側でも幼稚園の駐車場が利用できる。

幼稚園側に2歳・4歳の二人の子どもを育てている教諭が勤務しています。朝も子どもと共に出勤。帰りも子どもと共に帰宅。仕事も生活も共に充実した毎日を送っている。こうした子育てをしながら、お母さんが働ける施設になりました。

今までの単独型の幼稚園では、お母さんになりなかなか勤務する事が難しい状況で、結婚を機に退職することが当たり前で、終身雇用を実現する事はなかなか難しく考えられていましたが、実現できる可能性が膨らんできました。

1歳～6歳までの子ども達が園庭で接する機会が増え、特に幼稚園の4歳・5歳児は、保育園1歳児を見ると「かわいい～！」とまるで、自分の弟・妹的な感覚で話しかけたり、面倒を見たりと縦割り保育でいままでできなかった年の差の大きい異年齢との接触が自然とできるようになりました。

保育園の3・4・5歳児は、幼稚園にあるプールを利用できるため、保育園ではビニールプールのみと、年齢別で効率的に配備できる。

以上、抜粋。